

会員研究

長篠（設楽ヶ原）合戦の

真相に迫る

真野 信治

はじめに

天正三年（一五七五）五月二十一日、三河国長篠城を取り囲んでいた武田勝頼の軍に対し、後詰として出陣した織田信長・徳川家康連合軍が激突、兵力に劣る武田方が無謀な戦いを挑み大敗した。これがいわゆる長篠の戦であるが、戦闘のあった場所が設楽ヶ原という地名であったため、その名で呼ぶこともある。偉大であった父信玄の後を継いだ勝頼だが、この戦いで馬場信春・山縣昌景・内藤昌秀・真田信綱兄弟など多くの重臣を失ってしまった。このことが武田氏滅亡への第一歩になったという研究者もいる。

一・前哨戦

天正元年（一五七三）武田信玄の死を確実視した家康が奥三河へたびたび侵入したが、翌二

出来れば、ひよっとして家康を討ち取れたかもしれず、残念と言うほかない。大魚を逃がしてしまった勝頼は、その後はまた長篠城包囲陣に戻り、攻撃を再開したのである。

二・定説に沿った合戦の全容

定説に沿って合戦の経過を辿ってみる。長篠城を救援したい徳川家康は、単独では困難なことから信長に援軍を求めた。五月、織田・徳川連合軍がついに長篠城の後詰として設楽ヶ原に出張った。この時信長は、連吾川沿いに馬防柵を構築し、三千挺の鉄砲隊を配置して待ち構えたと言われる。勝頼は、重臣らの反対を押し切って設楽ヶ原に進出し、決戦に踏み切ったが、同時に徳川の別動隊が長篠城を包囲する武田の付け成群（主に齋の巢岩）を奇襲攻撃し、長篠城を解放した。勝頼は、二十一日

夜明けより全軍にて攻撃を開始したが、織田・徳川軍は、三千挺の鉄砲を三段に構えて待機し、武田軍の騎馬隊に銃撃戦を挑んだ。このため、馬防柵と鉄砲の攻撃に阻まれた武田軍は、多数

の重臣と将兵が戦死し、ついに総崩れとなった。『国史大辞典』には、「鉄砲の組織的活用画期がこの戦いであり（中略）この戦法の大成功により、武田氏に代表される騎馬中心の戦法から鉄砲主体の戦法へと主流が移った」とあるが、本当にそうだろうか。この通説に対し一九九〇年以降、これを厳しく批判する研究が相次いで出現し、信憑性の低い『甫庵信長記』や『甲陽軍鑑』より信頼できる『信長記』を重視している点が目立つ。

五月十六日、鳥居強右衛門から聞き出した信長の出馬情報を受け、武田方は恐らくこの後に軍議を開いた可能性がある。『甲陽軍鑑』によれば、重臣たちは撤退を主張、一方で長坂釣閑齋・跡部大炊介は決戦を主張。両者の激論が続く中、勝頼が最終決断を下したこととなっている。因みに長坂釣閑齋について、勝頼が長篠陣中より彼宛に書状を送っているのが、参陣していなかったという説がある。実はこの書状は今福「長閑齋」宛であり長坂「釣閑齋」ではないことが実証されている。したがって、長

坂は確実に参陣しており、跡部大炊介と共に決戦論をまくしたてたことは間違いない。『軍鑑』の長坂在陣の記述は正しかったのである。

三、自軍の全容、特に鉄砲隊を隠した信長

五月十八日、織田信長は長篠城手前の設楽原に着陣した。「志多羅の郷は、一段地形くぼき所に候。敵がたへ見えざる様に、段貼に御人数三万ばかり立て置かる」とあり、一部の軍を断正山背後に意図的に隠した可能性がある。信長は早朝、配置された鉄砲隊を見回り、各隊とも佐々内蔵助、前田又左衛門、野々村三十郎などの下知に従うようにと命ずる(『長篠日記』)。これがその鉄砲隊であった可能性が高い。同日、滝川、羽柴、丹羽の軍勢が鉄砲衆を押し立てて、武田軍に異常接近した。おそらく有海原を奥へ進み、武田軍が見える場所まで行き、対峙したのでらう。その際、その兵数を確認した勝頼は、これが織田軍のすべての兵数と勘違いをしたと見られる。つまり、敵の全兵力

を大幅に見誤ったということだ。これが後に重要な問題となる。

四、両将ともに自信あり

戦いの直前、信長・勝頼は共に自信をのぞかせている。五月二十日付、長岡兵部(細川藤孝)宛「この節、根切、眼前に候」とありと自身の程を披歴している(『細川家文書』)。また、勝頼も同日、今福長閑斎宛に「織田・徳川連合軍が後詰に出てきたものの、方策に迷って逼塞しているようだ」と返信し、なんのことはないと強気の見通しを述べている(東京大学史料編纂所蔵『武田勝頼書状』)。両将とも多少のニュアンスは違うが、かなりの自信を覗かせていることは非常に興味深い。

五、鉄砲三千挺と三段撃ちの虚構

まず、三千という数字は、『信長記』の写本により「千」であったり「三千」であったりするの、俄かには信じられない。多分、三千は虚構に近いと思われる。ただ、鳶の巢皆急襲隊に五百挺もの鉄砲を渡したことが事実で

あれば、少なくとも残り千挺はあったと考えたい。問題は、三段撃ちである。射撃の際の弾込めの時間を節約するために、三列にして交代で射撃するというのが専らの説であったが、様々な状況を踏まえ、あまり現実的ではないという研究者が多い。しかも最近、この三段の「一段」は何を意味するのかを検討した研究者は、三列に並べるといのは誤解で、鉄砲隊で編成された三個の部隊を指すか、或いは三カ所に部隊配置したという意味ではないかとの仮説を立てている。有名な姉川の戦いで、織田軍は十二段に構えたところだが、この「段」の表現と同じではないかということである。

六、別動隊を出撃させたのは、信長だけではなかった

五月二十日夜、両陣営からそれぞれ夜襲部隊が出撃した。織田・徳川方の鳶の巢皆奇襲は、本多忠次の働きで成功したのだが、一方の武田方の牛久保城夜襲部隊は、待ち伏せにあつて失敗したらしい。したがって、記録はなく、歴史の上からも全く無

視されている。勝頼は策を弄さずにかにも無策であったかのようには言われるが、やるべきことはやっていた事は認めるべきで、ただ不運であったと言うしかない。ここでも兵力と鉄砲挺数の差は無視できない。この牛久保城攻めは『三河国軍物語』に記されている。

七、武田騎馬隊突撃はあつたのか?

五月二十一日午前六時戦闘が開始される。定説では、開始と同時に武田方は騎馬隊にて攻撃を仕掛けてきたことになっているが、果たしてそのような攻撃はあつたのであろうか。我々は、ただでさえ黒澤明監督の映画『影武者』の戦闘シーンをイメージしてしまう。最近では騎馬隊の密集攻撃などは当時ではありえない、という見解が多い。しかしながら、信長が武田の騎馬攻撃を警戒し「馬防柵」を構築したことは紛れもない事実なので、そのことから武田騎馬衆とその攻撃は実際に存在していたということがわかる。なければ馬防柵など作る必要がないから

だ。『信長記』に「三番に西上野小幡一党、朱武者にて入替り懸り来る、関東衆馬上の巧者にて、是又馬入るべき行にて……」とあり、三番手が「是又」馬で攻めてきたとあるので、当然一番手、二番手も馬で攻めてきたことを暗示している。したがって、少なくとも何段かに分かれたの騎馬攻撃を行ったことは間違いない。但し、鉄砲と馬防の冊に向かつて遮二無二突入したかという点、そこまで無策であったとは思えない。武田方の攻撃が長時間にわたっていることから、ある程度接近した上で下馬して、鉄砲射撃を竹束で避けながら、波状に攻撃を加えたと考えるしかない。因みにこの合戦で赤備え（朱武者）隊は小幡一党であって、山縣昌景隊ではなかったことは、興味深い。ところで、勝頼は重臣たちの意見に耳を貸さず、御旗楯無の前で突撃を命じたというが、何か具体的な戦術はあったのだろうか。さすがに無策とは思えない。『甲陽軍鑑』の記述から、右翼・中央・左翼をそれぞれ五手ずつ全十五の隊に分け、先手・二番手・三番手

と順次投入体制を敷いていたことが窺われる。開始時点での武田軍の大まかな軍隊構成と配置は、〔左翼〕山縣昌景、原昌胤、小山田信茂、甘利信康他、〔中央〕内藤昌秀、武田道通軒、小幡信貞（信真）、武田信豊他、〔右翼〕馬場信春、真田信綱・昌輝、土屋昌統、一条信龍、穴山信君とされている。

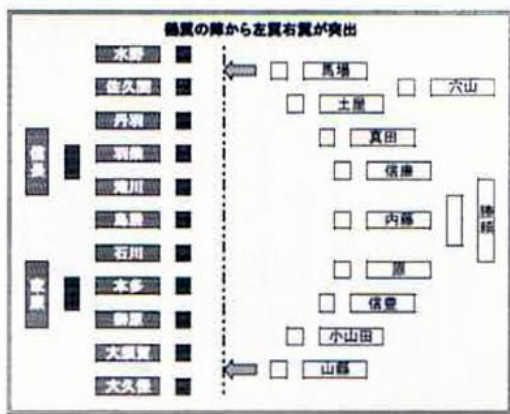
八、勝頼は確かな作戦を立案していた

考えられる勝頼の作戦を推理してみる。始めは陣立てを鶴翼の陣に構え、まず左翼の山縣昌景隊と右翼の馬場信春隊が突撃を仕掛ける。そしてこの両雄が率いる両翼の突出に釣られ、連合軍が左右に振られて、中央が手薄になったところを、内藤隊などの中央軍が敵陣中央を突破し、左右に分断・展開して包囲殲滅する。つまり鶴翼の陣に見せかけているが、実は魚鱗の陣、いわゆる「逆さ魚鱗」という戦術であったと推測するが、これにほぼ近い説を唱える研究者もいる。

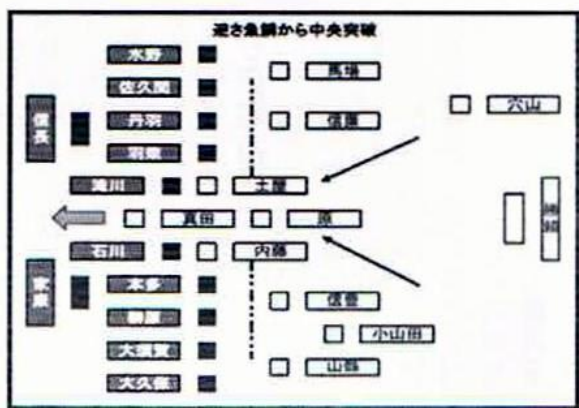
さらに勝頼自身が設楽ヶ原に

出張したのは、中央突破の際、そこに自分の隊も投入して全軍で連合軍を叩き潰し、一挙に信長・家康の首を取ることを考えていたのだろうか（「逆さ魚鱗」という陣形名は、漫画家宮下英樹氏の作品『センゴク天正記』による）。ただ、結果を知っている我々は、中央突破してもさらにその奥に隠されていた新軍の鉄砲隊が待ち受けていることがわかっていたので決定的な確な作戦ではなかったことがわかっていく。勝頼は相手の全兵力・全兵器を完全に見誤っていた。

〔図1〕鶴翼の陣を敷き、左翼右翼が突出



〔図2〕手薄になった敵中央を、逆さ魚鱗にて突破



九、武田方の突撃状況を推測する

では、実際の戦いの経過を推理してみる。卯の刻（午前六時）、武田軍の両翼の攻撃が始まる（この時点では、酒井忠次の鷹の巣襲撃は始まっていない）。山縣隊は、連吾川下流を迂回しながら柵内の徳川陣内に切り込み、陣形を崩す。馬場隊は、開始早々右前方の小高い丸山を占拠し、織田方の佐久間隊

を翻弄する。さらに山縣隊の攻撃はすさまじく、さすがの一騎「蛤切」本多忠勝も「あれこそ山縣なれ」と必死で狙撃させたところある（『三河物語』より）。山縣隊の突撃に臆し、飛び道具（鉄砲）で決着をつけようとしたと言われても文句は言えない（蜻蛉切が泣いている）。忠勝は初陣以来かすり傷すら受けたことがない豪傑と言われるが、なるほど無傷だったのはそういうことかと考えてしまう。そして予想通り、連合軍はその両翼の突出に影響され、援兵のため左右に軍を移動し、中央が手薄になる。そこへ、右翼の真田隊・土屋隊、中央の内藤隊などが中央突破を図る。かなりの犠牲が出たと考えられるが、複数の柵を抜けて連合軍の陣中に達した隊が数隊あった（『甲陽軍鑑』）。中でも真田隊の突撃は熾烈を極め、信長の本陣に迫る勢い。しかし、その瞬間に、隠していた織田方の鉄砲衆（佐々成政・前田利家隊他）が一斉射撃。馬防柵を突破した武田方はほぼ全滅に近い打撃を受け、撤退を余儀なくされた。さらにそこに羽柴秀吉・明

智光秀隊が加わり、中央突破作戦を無力化する。これにより、ただでさえ銃撃で犠牲者が増えていた武田方は、逆さ魚鱗の陣形が崩れ、作戦遂行が困難になる。兵力に余裕があれば、再度魚鱗の陣を構築して突撃することも可能であったろうが、ここきて当初からの兵力差は如何ともしがたく、重臣たちは徐々に危機感をつのらせる。山縣昌景、馬場信春らは、総崩れの前に勝頼に戦線離脱を勧めたと言われる。その時間を稼ぐために自らは引き続き突撃を敢行し、最後は討死をしてしまう。高野山成慶院『甲斐国供養帳』に、山縣昌景の討死は「未の刻（午後二時前後）」と記録されている。朝からの激戦であったにもかかわらず、討死が午後であったことがすべてを語っている。何度かの波状攻撃の末、そこに踏みとどまりしんがりの役割を果たしたのであろう。もちろん、山縣ばかりではなく、馬場、内藤昌秀、土屋昌統などそうそうたる猛者が命を落としたことは知られているが、そのほとんどが退却の最中であつたと考えられる。

以上の合戦経過は、あくまでも推量の域を出ないが、次の二つは意外に真相に近いと思われる。一つ目は、一般的に言われる織田鉄砲隊の一斉射撃は、最前線の効力はそれほどもなく、逆に、武田方の激しい鉄砲攻撃を伝える史料もある。それが、徳川方に属していた茶屋四郎次郎の負傷である。四郎次郎は、この戦いで右足に弾丸を受け負傷し、生涯それが抜けなかつたという（『南紀徳川史』）。このことから、武田軍にも鉄砲隊があり、突撃前に鉄砲隊同士の間打ち合いがあつた可能性を示している。用意した挺数はかなりの差があつたが、一方的に攻撃を受け続けたわけではないと思われ。二つ目は、「陣代」とされる勝頼は武田家の象徴「風林火山」の旗を掲げることが許されておらず、「大」の旗を用いざるを得なかつたこと。これは意外に知られておらず、このことが自軍兵の士気・活力に微妙な影響を及ぼしていたのかもしれない。それを薄々感じていた勝頼は重臣と共に突撃するつもりでいたのだろうが、彼らに制止

され、忸怩たる思いで撤退せざるを得なかつた。許せないのは、一門衆の穴山信君（のぶただ）である。『甲陽軍鑑』などの記述に従えば、彼は全く戦闘に加わらず、拳句の果てに「信玄以来の家老衆をことごとく殺してしまつたではないか」と捨てセリフを吐いて真つ先に撤退したという。事実であれば、なんとも愚劣な男であり、その思考回路を覗いてみたいところである。

十. 勝頼は何もしなければ勝つていた

『信長記』に「居陣候はば、何れともなすべからず候ひし」とあり、実は、武田軍が動かなければ織田軍はなすべがなかつたことを暴露している。したがつて、如何に勝頼を引っ張り出すかにかかつていたのだろう。その点、信長は様々な工夫を凝らし、勝頼引っ張り出しに成功している。一方武田方も、十六日の軍議で馬場信春が、まず長篠城を落とし、そこに勝頼を入城させ、ご親類衆を城の背後を守らせ、残る全軍が寒狭川を前に備え、山縣・内藤・馬場が渡河し、敵

と小競り合いを繰り返しながら長期戦に持ち込む。味方は信濃からの補給がたやすいが、織田方は大軍ゆえに兵糧などの問題で長期戦には持ち込めない、などの指摘をしている。だから安易に打って出る必要はない、と主張したかったのだろう。まさにその通りで、卓見と思われる。この馬場の作戦を採用していれば、大勝はせずとも負けなかつたことは間違いなく、勝頼の意識がそこに向けられなかったのは非常に残念である。

十一．なぜ歴戦の猛者が次々と討死したのか？

敗色濃厚の中、退却が始まって以降、次々と武田家重臣たちが討死する。夜明けとともに戦いの火蓋が切られ、鳶の巢皆壊滅の事実がありながらも、武田方は臆せず長時間にわたって強攻を仕掛けたことは事実である。味方の多くが討たれる中、踏みとどまりながらなぜそこまで頑張れたのか？平山優氏が興味深い指摘をしている。『軍鑑』には戦功についてのランク付けが記載されており、一番鎗と共に「場

中の高名」という戦功があるといる。絶体絶命の状況下で恐怖状態に陥らず踏みとどまり、命を顧みずに奮戦した者は最終的に一番鎗として最高の榮譽を受けるというものである。つまり、我々から見れば無謀とも思える突撃の繰り返しや、逃亡したり勝手に退却したりしないのは、こうした名誉意識が武田軍全軍に浸透していたのではないかと、ということである。事実、馬場隊は指揮官信春と共にほとんどの兵が最後まで逃げずに奮戦したと言う。もちろん『軍鑑』の記述は信憑性を議論すべき余地がある。逆説的に、こうした勇敢な将兵の美意識と行動が甚大な敗戦を招いてしまったことも事実として付け加えたい。

おわりに

長篠合戦の真相に迫ってみたい。開戦と同時に、武田軍は鉄砲隊・弓隊を先方配置しながら、左翼右翼が前進し、その後に騎馬衆が突撃して敵を引き付け、その隙について中央突破を敢行した作戦は十分にあり得ると愚考する。同時に、兵力差・鉄砲数

の差は如何ともしがたく、ほぼ「人」と「物」の数の差が勝敗を分ける要素であったことも間違いない。最近では、通説である「旧戦法への新戦法」、「兵農分離の差」などを敗因とする説は影を潜めてきているのも事実である。

△参考文献▽

平山優『長篠合戦と武田勝頼』、『検証長篠合戦』
名和弓雄『長篠・設楽原合戦の真実』二木謙一『長篠の戦い』

